

二〇一〇年をふりかえって

藤本 恵

最初から、求められもしない自己紹介をするようで気恥ずかしいが、私は三〇代の大学教員である。そのせいか、二〇一〇年の社会現象で最も気になり、現在も心配しつつけているのは、大学生の就職内定率の低下だ。なにしろ、二〇一〇年度卒業予定の大学生の内定率は六八・八％。前年比、四・三ポイント減、調査を開始した一九九六年以降もっとも低い数字だという（二月一日現在。文部科学省・厚生労働省の調査による）。文科省は、「集中支援」を呼びかけ、大学でも対応を始めているが、四年生の混迷も三年生の不安もすぐには晴れない。そして、いまさら言挙げするまでもなく、恒常化した不況と、気まぐれで短い好景気のなかで、努力の報われにくい、先の見えない閉塞感とともに子

ども時代を過ごしてきたのが今の大学生であり、過ごしつつあるのが今の子どもである。

二〇一〇年には、そういう大学生と子どもとの交流を描いたYA『遠まわりして、遊びに行こう』（花形みつる 理論社 二月）に出会った。ただし、主人公の大学生・新太郎がアルバイトをする「遊び塾」の子どもたちは小学校一〜三年生で、閉塞感とは無縁。「我慢を知らず欲望には忠実」な「おサル」、よく言い換えれば、生命力にあふれた存在である。新太郎は、失恋や両親の経済状況の悪化で「プチひきこもり」になっていたが、「おサル」たちと関わることで殻を破り、小学校教員になるという目標を得る。

子どもが人を救うという関連で、もう一つ頭に浮かぶのは『まつりちゃん』（岩瀬成子 理論社 九月）。父の事業の失敗や母の病気で独居することになった五歳のまつりちゃんは、学校になじめない小学生や高校生、生きがいを持ってない老夫婦と交流して、彼らの心をあたためる。

両作品とも、背景として経済の悪化が描かれるが、子どもはそれに損なわれず、生き生きとした生命力や純粹さで他者を救う。これは、おそらく子どもより大人読者の求める子ども像で、そのせいか『遠まわりして、遊びに行こう』は一般紙（誌）の書評でも取り上げられた。『まつりちゃん』は、書店や図書館で、一般書ではなく、YAや児童書の棚に置かれてみると、かえって違和感がある。